

## 沿岸域活断層調査「布引山地東縁断層帯」(1) 高分解能地層探査結果 Off shore active fault survey "Nunobiki sanchi eastern Fault group". Result of high resolution geostratigraphic survey.

八木 雅俊<sup>1\*</sup>, 坂本 泉<sup>2</sup>, 横山 由香<sup>2</sup>, 滝野 義幸<sup>2</sup>, 古畑卓真<sup>2</sup>, 原田義信<sup>2</sup>, 根元謙次<sup>2</sup>, 藤巻三樹雄<sup>4</sup>, 岡村 行信<sup>3</sup>  
Masatoshi Yagi<sup>1\*</sup>, Izumi Sakamoto<sup>2</sup>, Yuka Yokoyama<sup>2</sup>, yoshiyuki takino<sup>2</sup>, FURUHATA, Takuma<sup>2</sup>, HARADA, Yoshinobu<sup>2</sup>, NEMOTO, Kenji<sup>2</sup>, FUJIMAKI, Mikio<sup>4</sup>, Yukinobu Okamura<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 東海大学大学院, <sup>2</sup> 東海大学海洋学部, <sup>3</sup> 独立行政法人産業技術総合研究所活断層・地震研究センター, <sup>4</sup> 沿岸海洋調査株式会社

<sup>1</sup>Graduate school, Tokai University, <sup>2</sup>School of Marine Science and Technology, Tokai University, <sup>3</sup>Active Fault and Earthquake Research Center, <sup>4</sup>Coastal ocean research, Co.

中央構造線を底辺とし、伊勢湾、大阪湾、若狭湾を結ぶ三角形の領域は近畿三角地帯とされ、活断層が多くみられる。東海大学では平成24年度「沿岸域における活断層調査」のうち、布引山地東縁断層帯の海域延長部において断層の形状や分布、変位を確認するため、高分解能地層探査を伊勢湾西側（鈴鹿市沖の北部、白子沖の中部、津市沖の南部）の浅海域で実施した。

結果、北部では既存の鈴鹿沖断層の南端延長部において、北東-南西方向に湾曲した断層起源と思われる基盤状の高まりが確認された。この基盤上に分布する大陸棚堆積物に変位は観察されなかった。この基盤の高まりには多くの褶曲構造を示す傾斜した反射面や方向性を持つ溝地形が認められた。

中部では、湾中央へ向かい海脚状の地形が発達している。この海脚南側斜面では北側隆起の音響基盤が断層を伴って東西方向に発達しているのが確認された。この断層は既存の白子-野間断層と調和的である。しかしながら、大陸棚堆積物中に変位は確認されなかった。海脚状地形の北側縁辺部においては横ずれ断層の特徴とされるフラワー構造が確認された。

南部では、大陸棚堆積物が厚く発達し、その下位の水深30m付近には緩やかな傾斜をもつ段丘状の地形が認められた。また、この周辺では局地的に約1万年前より新しい年代を示す地層に変位が認められる新規断層NF-6~9の存在が確認された。これらが布引山地東縁断層帯の海域部延長部であるかは不明である。これらの新規断層は全体的にN-S方向を呈しているが、北部の白子-野間断層と接するNF-6断層ではNE-SW方向に変化している。

以上、本調査域では、表層にまでいたる活断層による明瞭な変位は確認されなかった。しかしながら、これまで北側隆起の逆断層であるとされてきた白子-野間断層が横ずれ成分も有している可能性が推定される。

キーワード: 活断層, 伊勢湾, 横ずれ断層, フラワー構造

Keywords: Active Faults, Ise Bay, Strike-slip faults, Flower structure